

愛知県日置八幡宮所蔵木造獅子頭考

● 蔭山誠一

愛知県愛西市日置八幡宮所蔵木造獅子頭の歴史的位置付けを考えるために、中世前半期における東海地域と中国地方西部の木造獅子頭の形態変遷と地域の特徴を明らかにした。そして建長四（1252）年製作銘の判明した日置八幡宮所蔵獅子頭を通して、鎌倉時代から室町時代前半にみられる東海地域と中国地方西部にみられた共通する変化を様式的変化と捉え、地域の製作者（工人）が当時の文化の中心地からデザインを入手した可能性と東海地域に見られる小地域色の出現を地域の製作者（工人）が以前から存在した獅子頭の写しの結果としておこる地域変容として考えた。また、日置八幡宮が所在した日置荘の資料を通じて日置八幡宮所蔵木造獅子頭製作の背景を指摘した。

はじめに

仮面としての獅子頭は古代の伎楽における先導役の仮面として仏教とともに日本に伝えられたもので、平安時代後期以後は寺院や神社の行道に伴う先導役の仮面として、近世以後は大神楽や神社の祭礼などに伴う風流系舞の仮面として発展してきたものである。現在、我が国の残る古い獅子頭は伎楽面として残る正倉院のもの、その後の行道面が主に神社や寺院の伝世品として各地に残され、その一部は国や県等の地方自治体の文化財として指定され、保存されてきた。

（1）木造獅子頭の研究史

木造獅子頭に関連する研究には、獅子頭の彫刻としての研究と獅子舞など芸能として民俗から見た研究がある。工芸品（彫刻）としての研究として田邊三郎助氏による一連の研究（田邊1981・1986・1997）、臼杵華臣氏による山口県における研究（臼杵1984）、岩手県立博物館による門屋光昭氏の研究（門屋1981）などがある。民俗から見た研究では全体的に江戸時代後期以後の新しい獅子頭を用いる獅子舞を研究することもあり、獅子頭に関する分析はほとんどない。ここでは、彫刻としての木造獅子頭の形態的分析がなされている門屋氏と田邊氏の中世の木造獅子頭の研究成果について大略をとりあげる。

門屋氏は岩手県黒森神社の中世から近代にか

けての木造獅子頭の民俗・芸能と獅子頭の形態について分析され、「黒森神社の権現さま一覧」として、獅子頭の形態変遷について後頭断面の様式（半月形→角形）、鼻と目の間の刻み（鈍角→鋭角）、鼻や眉のつくり・頬の盛り上がり（豪壮さ・個性的→柔らかさ・形式的・装飾的）などの年代差が指摘され、全体的に前代のものをモデルにして作り続けられた結果、初期の力強い豪快な刀法は次第に薄れ、省略や装飾が加えられて形式的類型的になっていったとされている。

田邊氏の研究は平安時代の作とされる奈良県法隆寺の木造獅子頭や広島県御調八幡宮の木造獅子頭から中世の紀年銘が残る獅子頭についての変遷が全体の肉取りや舌の工作、植毛の仕方、眉の形態、目鼻立ちや口縁の彫り口にみられる象形など時代的变化や特徴を分析されている。木造獅子頭の形態的特徴の変遷は、平安時代の法隆寺から防府天満宮、伊奈富神社、津波倉神社の獅子頭に連なるカサ高の一群と御調八幡宮から丹生神社、石川の白山神社の獅子頭に続くやや扁平な感のある一群の二つの形態の流れがあるとされ、このカサ高の形態の獅子頭と扁平な形態の獅子頭が静岡県息神社において製作年が1年違いで存在することから、息神社の獅子頭の製作に当たり、2つのサンプルが存在したことが指摘されている。その後南北朝期の地方の作にすでに見られた肉取りが角張って抑揚がなくなる傾向は、室町時代（15世紀以後）には両者の系統ともより一般化し、より角張っ

てくるとされる。これと並行して室町時代には背景として地方での製作が多くなり、全般的に木彫りや漆塗りの技術が低下すると指摘されている。室町時代の後半から桃山時代にかけては、顎は角張ったままであるが、頭部が高く、鼻から顎の前方部が低く締まって形の良いものの数が増すとされ、江戸時代には一部を除いて耳が頭部と共彫りのもの、別製でも固定されるもの、舌が下顎の上に削り出されるだけのものなどの工作上の簡略化が一般化し、形態においてもバリエーションが増すことが指摘されている。また岩手県黒森神社における中世末から江戸時代にかけての獅子頭の製作に関して、前代からのものを「写す」という行為がある場合と同じ地域におけるその他の場合の獅子頭との違いについて分析されている。

(2) 本論の目的

本論は、平成 18 年度に愛知県愛西市（旧海部郡佐屋町）日置町所在の日置八幡宮に残る木造獅子頭の市の文化財指定に関わり、その後保存処理の為に現状を実測・調査したのが始まりで、この獅子頭の歴史的位置付けを深めることにより愛西市日置地域の歴史を考えることが目的である。また、後に述べるように、日置八幡宮所蔵獅子頭の修復作業の中で、上顎から新たな紀年銘が発見された。この成果により鎌倉時代から室町時代の東海地域における獅子頭の変遷と地域的特徴を明らかにし、日置八幡宮所蔵木造獅子頭の分析を通じて中世前半期における木造獅子頭製作の特徴に迫ることが可能であるように思われる。

日置八幡宮所蔵木造獅子頭の概要

まず、日置八幡宮所蔵木造獅子頭の概要を示す（図 1・図 2、写真 1～写真 6 参照）*。

(1) 日置八幡宮と木造獅子頭

愛西市日置八幡宮は愛知県の南西部旧海部郡佐屋町大字日置地内にある八幡宮で、古い建物は残っていないが、銅製掛け仏や狛犬 1 対などが残され中世から続く社である。それらと一緒

に保管されてきたのが今回分析する木造獅子頭で、獅子頭がどのような神事および芸能に使用にかんする伝承は残されていないが、江戸時代後期に編纂された『尾張名所図絵』に「同（八月）十六日、神寶蟲拂ありて、古き弓矢・獅子頭及び經卷等を諸人に見せしむ」とあり、日置八幡宮の木造獅子頭が古くから社宝として伝えられてきたものである。下顎裏宝珠形掘り込み穴内に、「[] 作事／享徳甲戌／八月日／淨教 父子／[]」（[] 内は判読不能）という墨書銘が確認でき、享徳甲戌すなわち享徳（1454）3 年の作であることが記されている。残存状況は、下顎部分には虫食いがほとんどなく、漆塗りがほとんど剥落していないが、上顎部分は漆の塗りが多く剥落し、虫食い穴が多く存在する。上顎右側眼付近の内面にて、紙と黒漆による補修の痕跡が見られる。また獅子頭前面の左側から口部にかけて大きな割れが入り、上顎の接合部（右側）などはすでに欠損している。平成 19 年度に修復が行なわれた。

(2) 木造獅子頭の形態

現状の獅子頭は高さ 30.5cm、幅 42.2cm、長さ 48.5cm で、上顎右側が欠損していることから、本来の大きさは幅がもう少し広くなるものである。正面から見た形態は、上顎頭部が緩い丸みを帯びたうねりをもつ平坦な形から、側面の口元にかけて比較的大きく膨らみ、下顎にかけてややすぼまる形態で、猫科動物の頭部の正面から見た形に似ている。側面から見た形態は上顎頭部の基部からやや下がりながら平坦に眉間に至り、額が垂直に近い傾きで下がって、眉間より低い鼻先に至る。また目と眉がともに眼の前面から大きく側面後方に伸びることも特徴的である。下顎は中央部が丸く底をなし、口先部と顎の基部にかけて少し立ち上がって浮いた状態である。

各部分の形態について、眼は眉間の中央側にややうねりのある太い眉の下に左右がややつり上がって見える赤色の縁取された金色の眼があり、その中に赤色の縁取りに黒色の瞳が大きく見開いている。鼻は眉間を寄せた筋肉の表現の形式化したものと思われる二段の砲弾形の段が鼻稜として鼻先に伸び、幅広でやや低い団子鼻へと続く。鼻の穴は赤色で円形の形で貫通し

* 日置八幡宮と愛西市教育委員会から資料の提供を受けた。
財団法人元興寺文化財研究所 2008 日置八幡宮所蔵木造獅子頭の修復と収納箱の製作事業の『修復報告書』

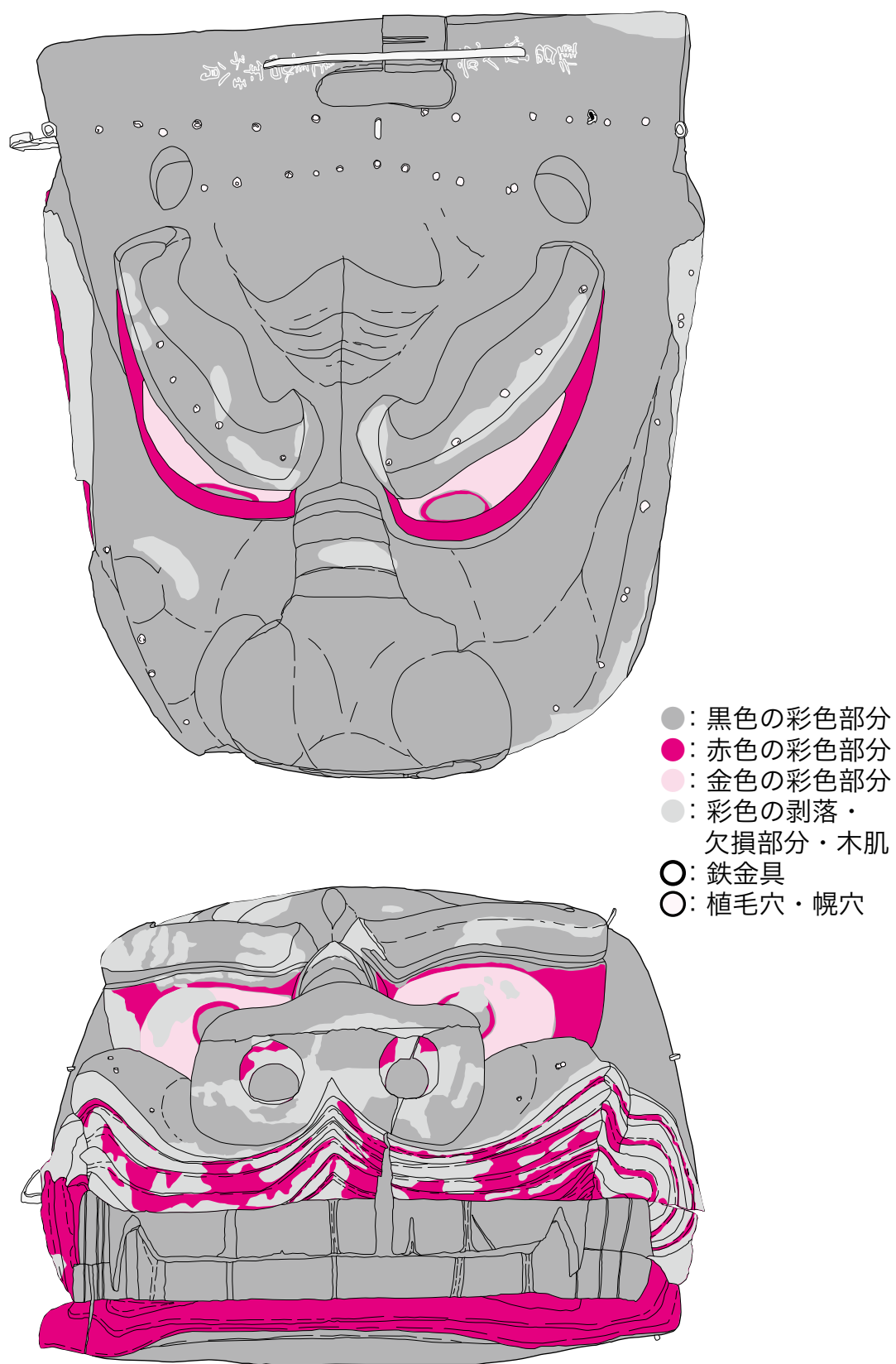
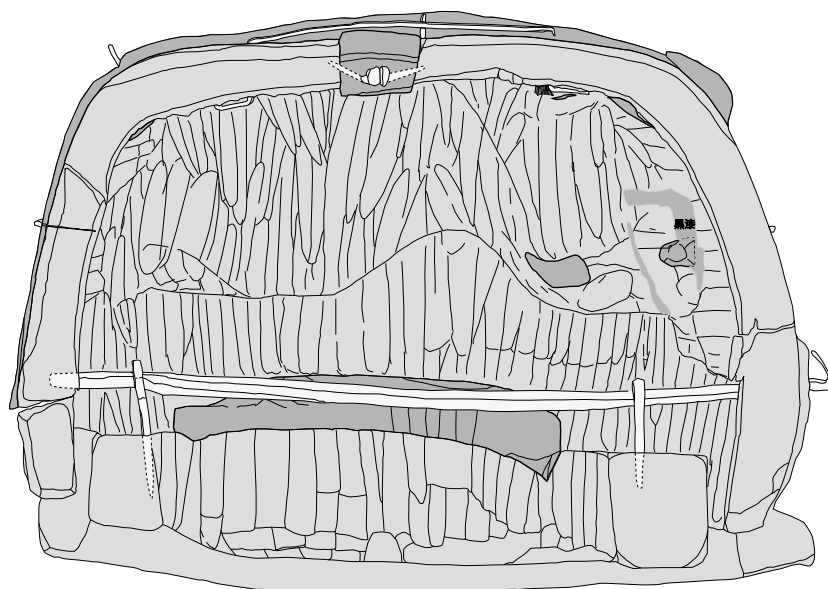
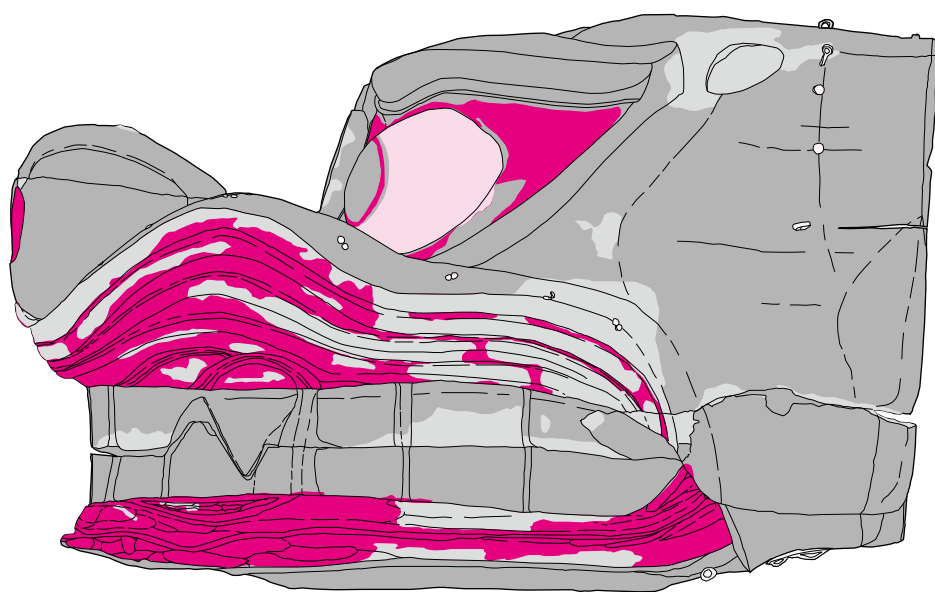


図1 日置八幡宮所蔵木造獅子頭実測図 俯瞰（上図）・正面（下図）（1：4）



- ：黒色の彩色部分
- ：赤色の彩色部分
- ：金色の彩色部分
- ：彩色の剥落・欠損部分・木肌
- ：鉄金具
- ：植毛穴・幌穴

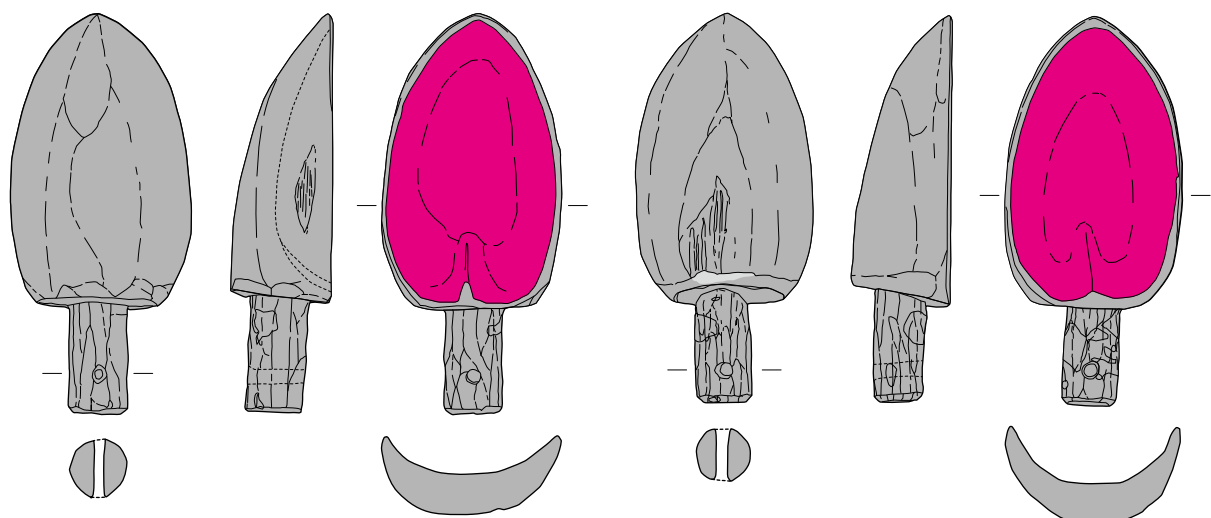


図2 日置八幡宮所蔵木造獅子頭実測図 左側面（上図）・背面（中図）・耳（下図）（1：4）

ている。上顎は鼻先の下から左右の牙にかけて大きなうねりをもって表現され、口元に至る。唇は上唇が5段、下唇が3段の表現がされている。歯牙は下顎の牙が前にくるもので、上顎・下顎とも20本で表現され、幅広の歯牙である。

色調は先に述べた部分もあるが、外面全体が黒塗りで眼と鼻の穴、上下の唇が赤色、眼が金色である。内面は上顎の頭部側と下顎部分全体が黒色で塗られている。植毛穴は木釘等で埋められている所や補修により重複する箇所もあるが、頭部頂部に2列、左右の眉に1列、左右の上唇の上に1列あり、重複するものも含めて頭部頂部が23個、眉の上部が左右とも5個、上唇の右側が4個、左側が9個確認できる。

(3) 平成19年度の修復に伴う新成果

日置八幡宮所蔵木造獅子頭は日置八幡宮と愛西市より「日置八幡宮所蔵木造獅子頭の修復と収納箱の製作」事業として財団法人元興寺文化財研究所に委託され、調査と修復が行なわれた。調査は木造獅子頭の破損・劣化状況と構造を観察する為のX線透過撮影と獅子頭の下顎底部の宝珠穴にある墨書を赤外線撮影、獅子頭の樹種同定を行った。修復は燻蒸とクリーニング、木胎の強化、漆幕の剥落止め、亀裂部分の補填、破損破片の接着、鉄製金物の防錆、鋸の除去（上顎後頭部上辺にある線刻銘文の調査と破片の接着の為）、補填箇所の彩色が行なわれた。

獅子頭の樹種は当初から下顎は後補の可能性があった為、上顎と下顎の樹種の調査を行った。その結果、上顎はエノキ、下顎はヒノキにより製作されており、別素材により製作されていることから、下顎は後補である可能性高くなった。修復前の予見を追認するものであった。

修復に伴う漆膜表面の汚れを除去する過程で、獅子頭の上顎後頭部上辺の鋸にかかる位置に銘文があることが判明した。銘文は線刻されたもので、線刻された文字の上に古い修復による黒漆の塗布が見られる。現在まで残る鋸はその黒漆の上に打ち込まれていたものであった。修復による鉄製鋸の除去により、上顎右側に「建長四年壬子八月」、上顎左側に「(奉カ) 施入盛カ 西カ 禅カ (師カ)」の銘文が判読された。この文字の判読により、日置八幡宮の獅子頭は上顎部分が1252（建長四）年に製作され、下顎部分が

1454（享徳三）年に製作されたことが判明した。施入した者を示す人名については今後の検討が俟たれるが、獅子頭の製作時期が鎌倉時代中頃に特定できたこと、平成20年3月10日時点において木造獅子頭では最古の製作紀年銘をもつ資料となった（奈良正倉院に残る獅子頭面を除いて）。

東海地域における獅子頭の変遷と特徴

ここでは、東海地域における木造獅子頭の変遷と特徴を検討する。

(1) 獅子頭の形態分類

先に述べた門屋氏と田邊氏の研究を参考にしながら、今回は木造獅子頭の特徴における正面から見た形態と側面から見た形態、上顎の植毛（穴）の位置と数量・上顎における植毛表現の3項目について着目したい。

○獅子頭の正面観

獅子頭の正面観（頭部後方部の横断面形）として、以下の獅子型、半球型、箱型の3型式に分類する。

獅子型：上顎頭部が猫科動物の骨格や肉付きを反映したものと考えられるもので、頭部頂部が比較的平坦かやや丸みをもつもので、頭部の左右と上顎頬部がやや張り出した形態のもの。

半球型：獅子型から変化したものと考えられるもので、上顎頭部から上顎頬部にかけて、全体に丸みをもつもので、上顎の横断面形が全体で半球状、丸い山形の形になるもの。

箱型：上顎の頭部頂部は丸みをもつが比較的平坦で、上顎の側面がほぼ垂直に立ち上がるもの。上顎の横断面形が箱状に見える。

○獅子頭の側面形態

獅子頭の側面形態（上顎部の縦断面形）として、以下の3型式に分類する。

A類：上顎の比較的鼻先が低く、鼻梁が後方に凹んで伸びた後、額が垂直からやや斜めに立ち上がるもの。牙に伴う上唇と上唇の筋肉部分の抑揚が比較的大きく、目尻の下端より上まで膨らむもので、上唇の膨らみが眼の前面付近から鼻梁が鼻先に向けて立ち上がり始める位置の間にある。眼は目尻が側面に大きく切れ長に伸び、眼に伴う眉の表現も側面後方に比較的長く伸び

る。

B類：上顎の鼻先が比較的高くなり、後方に伸びる鼻梁の凹みが浅くなり、額が斜めに立ち上がるもの。頭部の頂部から鼻稜の凹みにかけて一連に下がる傾向がみえるものがある。牙に伴う上唇と上唇の筋肉部分の抑揚が小さくなり、上唇の膨らみが目尻の下端より下にあるもので、上唇の膨らみの位置はA類とほぼ同様であるが、やや鼻先に近い位置にある傾向がある。眼は目尻が側面にあまり伸びず、眼に伴う眉の表現も側面後方への伸びが短くなる。

C類：上顎の鼻先が高くなり、後方に伸びる鼻梁の凹みが浅くなり、額が斜めに立ち上がるもの。頭部の頂部から眉間まで比較的平坦になる。牙に伴う上唇と上唇の筋肉部分の抑揚はほとんどなくなり、上唇の膨らみが目尻の下端より下にあるもので、上唇の膨らみが口先の前面にみられるようになる。この口先の膨らみが前面に出ることにより、全体が角張った印象になる。眼は目尻が側面にあまり伸びず、眼に伴う眉の表現も側面後方への伸びが短い。

○植毛（穴）の位置と数量、植毛の表現

植毛（穴）と植毛の表現は一連のものであるため、ここにまとめて分類する。植毛（穴）、植毛表現がされる位置は上顎の頭部頂部、眉部（瞼部分も含む）、上唇部分、側面頬の部分、下顎の前面から側面の縁部分の5ヶ所があり、植毛（穴）や、線刻による表現、線画や描画による彩色表現、彫刻による浮き彫りによる立体的表現の4つの手法がある。

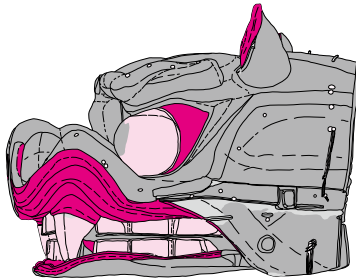
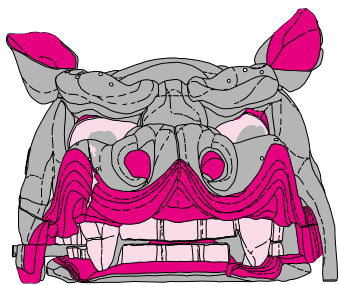
（2）東海地域における獅子頭の変遷（図3・図4）

次に前節における分類を元に東海地域における獅子頭の形態の変化を述べる。獅子頭の正面観については、獅子型は愛知県知立市知立神社所蔵獅子頭、愛知県愛西市日置八幡宮所蔵獅子頭、岐阜県美濃市真木倉神社所蔵嘉元三（1305）年銘獅子頭、静岡県浜松市息神社所蔵慶安七（1374）年銘獅子頭がある。半球型には岐阜県美濃市白山神社所蔵至徳二（1385）年銘獅子頭と無銘獅子頭、静岡県浜松市息神社所蔵永和元（1375）年銘獅子頭がある。箱型には愛知県一宮市真清田神社所蔵文明三（1471）年銘獅子頭と愛知県愛西市星大明社所蔵永正七（1510）年

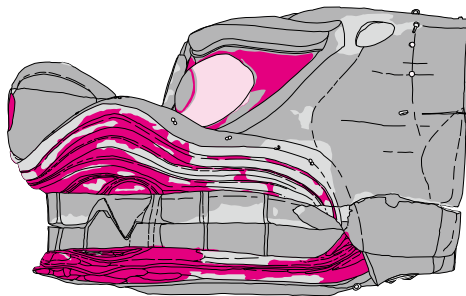
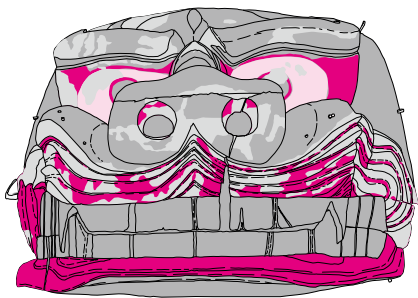
銘獅子頭、岐阜県美濃加茂市天神神社所蔵長享二（1488）年銘獅子頭、三重県桑名市神館神社所蔵永享七（1435）年銘獅子頭がある。

獅子頭の側面形態については、A類は正面観が獅子型の愛知県知立市知立神社所蔵獅子頭、愛知県愛西市日置八幡宮所蔵獅子頭、岐阜県美濃市真木倉神社所蔵嘉元三（1305）年銘獅子頭がある。真木倉神社所蔵獅子頭は鼻先が高く表現されるものなのでB類に近い側面観がある。B類は正面観半球型の岐阜県美濃市白山神社所蔵至徳二（1385）年銘獅子頭と無銘獅子頭、正面観獅子型の静岡県浜松市息神社所蔵慶安七（1374）年銘獅子頭がある。白山神社所蔵獅子頭の一对のものはどちらも額前面の鼻梁部分を削っており、側面形態ではA類に近い部分があるが、至徳二（1385）年銘獅子頭は眼の前面近くに上唇の筋肉の盛り上がりがありB類の典型的なもので、無銘獅子頭は上唇の筋肉の盛り上がりやや鼻先に近い位置にあり、C類に近いものである。C類は正面観箱型の愛知県一宮市真清田神社所蔵文明三（1471）年銘獅子頭と愛知県愛西市星大明社所蔵永正七（1510）年銘獅子頭、岐阜県美濃加茂市天神神社所蔵長享二（1488）年銘獅子頭、三重県桑名市神館神社所蔵永享七（1435）年銘獅子頭、正面観半球型の静岡県浜松市息神社所蔵永和元（1375）年銘獅子頭があり、神館神社所蔵獅子頭の上唇の筋肉の盛り上がりはややB類に近い側面形態をもつ。

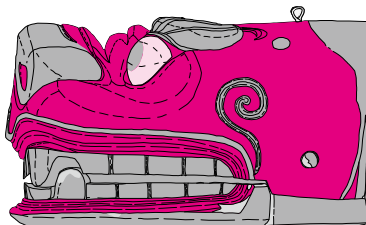
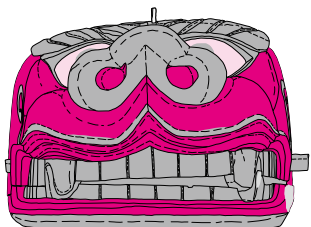
獅子頭の植毛と植毛の表現については、東海地域には頭部頂部と眉部、上唇部、下顎前面の縁部に植毛（穴）がみられるものは、岐阜県岐阜市諏訪神社所蔵嘉元四（1306）年銘獅子頭のみで、植毛数は確認できていないが上唇の植毛穴が多数確認できる（町田市立博物館1997『獅子頭-西日本を中心に-』21頁にて確認）。頭部頂部と眉部、上唇の植毛穴が確認できるのは愛知県知立市知立神社所蔵獅子頭と愛知県愛西市日置八幡宮所蔵獅子頭、岐阜県美濃市白山神社所蔵至徳二（1385）年銘獅子頭、同無銘獅子頭があり、眉部と上唇に植毛穴が確認できるのが三重県鈴鹿市伊奈富神社所蔵弘口（安）三年銘獅子頭（町田市立博物館1997『獅子頭-西日本を中心に-』21頁にて確認）で、岐阜県美濃市



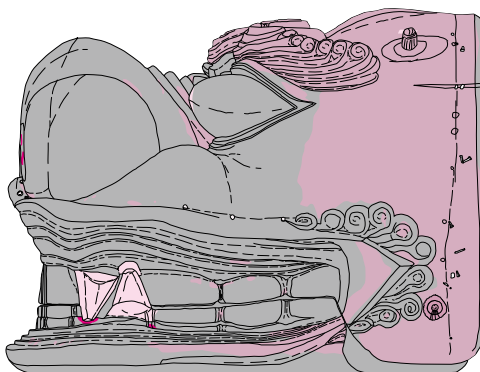
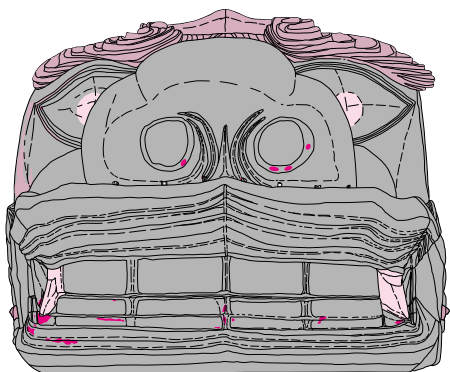
愛知県知立市知立神社：獅子型・A類



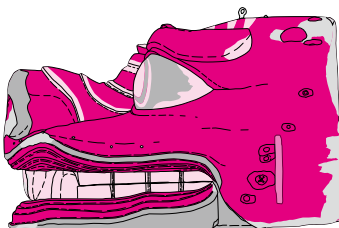
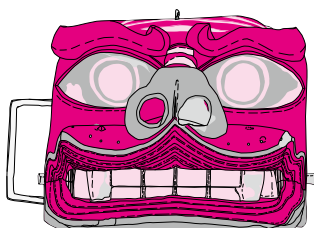
愛知県愛西市日置八幡宮〔建長四（1252）年銘〕：獅子型・A類



三重県桑名市神館神社〔永享七（1435）年銘〕：箱型・C類



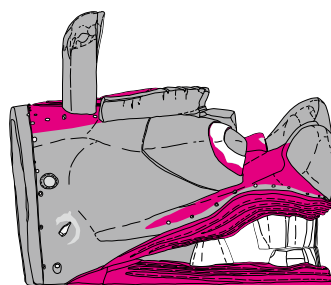
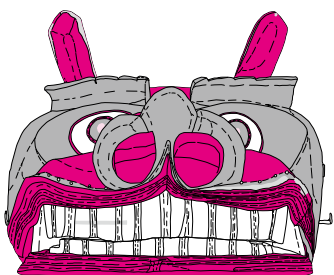
愛知県一宮市真清田神社〔文明三（1471）年銘〕：箱型・C類



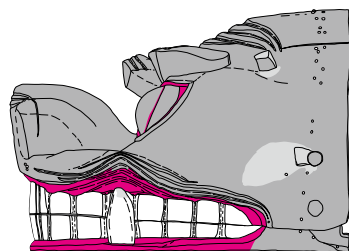
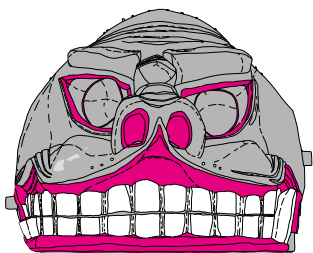
愛知県愛西市星大明社〔永正七（1510）年銘〕：箱型・C類

- ：黒色の彩色部分
- ：赤色の彩色部分
- ：金色の彩色部分
- ：緑色の彩色部分
- ：彩色の剥落・欠損部分
- ：鉄金具
- ：銅金具
- ：植毛穴・幌穴など

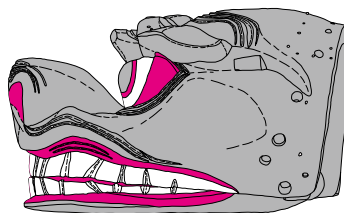
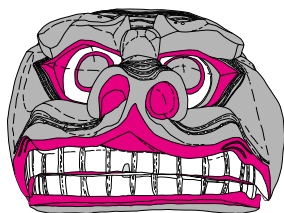
図3 東海地域の獅子頭1（1：8）



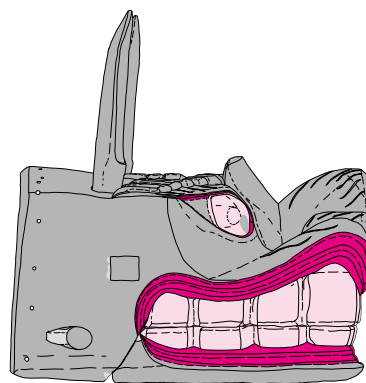
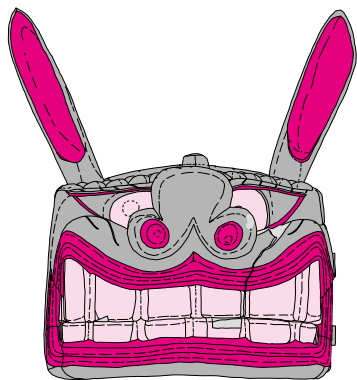
岐阜県美濃市真木倉神社〔嘉元三（1305）年銘〕：獅子型・A類



岐阜県美濃市白山神社〔至徳二（1385）年銘〕：半球型・B類



岐阜県美濃市白山神社〔無銘〕：半球型・B類



岐阜県美濃加茂市天神神社〔長享二（1488）年銘〕：箱型・C類

- ：黒色の彩色部分
- ：赤色の彩色部分
- ：金色の彩色部分
- ：白色の彩色部分
- ：彩色の剥落・欠損部分
- ：鉄金具
- ：銅金具
- ：植毛穴・幌穴など

図4 東海地域の獅子頭2（1：8）

真木倉神社所蔵嘉元三（1305）年銘獅子頭は、眉の後方である頭部頂部と上唇に植毛穴が確認できる。眉部と上唇に植毛穴が確認できるのは、14世紀後半までの獅子頭に限られる。また岐阜県関市武芸八幡宮所蔵観應二（1351）年銘獅子頭には眉部と頭部は不明であるが、上唇と下顎前面縁部に植毛穴が確認できる（町田市立博物館 1997『獅子頭－西日本を中心に－』37頁にて確認）。植毛穴が上唇のみに確認できるのは、静岡県浜松市息神社所蔵慶安七（1374）年銘獅子頭、愛知県一宮市真清田神社所蔵文明三（1471）年銘獅子頭と愛知県愛西市星大明社所蔵永正七（1510）年銘獅子頭がある。

植毛の表現として線刻による表現があるものは、全て上唇にされたもので、岐阜県美濃市白山神社所蔵至徳二（1385）年銘獅子頭と同無銘獅子頭、岐阜県美濃加茂市天神神社所蔵長享二（1488）年銘獅子頭、静岡県浜松市息神社所蔵永和元（1375）年銘獅子頭がある。彫刻による浮き彫り表現は岐阜県美濃市真木倉神社所蔵嘉元三（1305）年銘獅子頭の眉部、愛知県真清田神社所蔵文明三（1471）年銘獅子頭の眉部分と頬部分、岐阜県美濃加茂市天神神社所蔵長享二（1488）年銘獅子頭の眉部、三重県鈴鹿市伊奈富神社所蔵弘口（安）三年銘獅子頭（町田市立博物館 1997『獅子頭－西日本を中心に－』21頁にて確認）、三重県桑名市神館神社所蔵永享七（1435）年銘獅子頭の頬部、三重県鳥羽市加茂神社所蔵天文十四（1545）年銘獅子頭の上唇（町田市立博物館 1997『獅子頭－西日本を中心に－』44頁にて確認）があり、三重県鈴鹿市伊奈富神社所蔵弘口（安）三年銘獅子頭と三重県桑名市神館神社所蔵永享七（1435）年銘獅子頭の頬部は同じ形態の1条の巻き毛が表現されている。

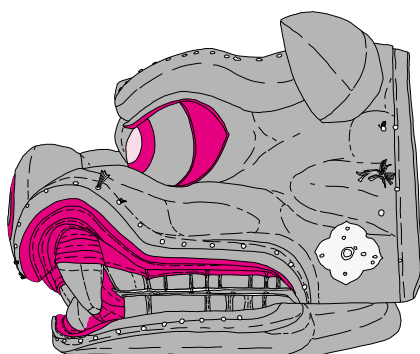
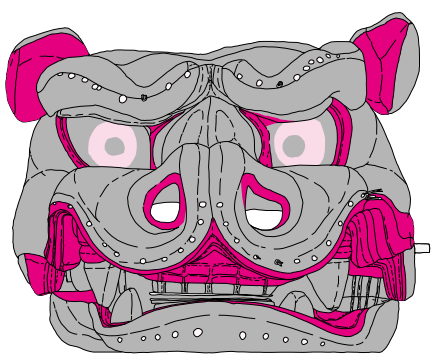
以上の東海地域の獅子頭の変遷をまとめると、14世紀前半頃までの獅子頭は正面観獅子型と側面形態A類が主に伴い、植毛が眉部と上唇部分に比較的多く施されるものが多く、14世紀後半には獅子頭の正面観半球型と側面形態B類が伴い、植毛が残るものの、新たに植毛の線刻表現されるものや、眉部の植毛が無いものが見られるようになる。15世紀の獅子頭は正面観箱型と側面形態C類が伴うようになり、植

毛は上唇部分に施されるものが残るが、線刻表現や彫刻による浮き彫り表現が行なわれるものがみられる。このように、東海地域における中世前半期における獅子頭は、正面観獅子型から半球型、次に箱型へと変遷し、それに伴って側面形態や植毛と植毛表現が変化していくことが明らかにできた。

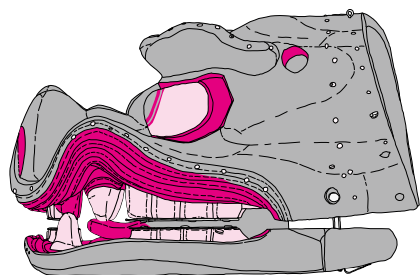
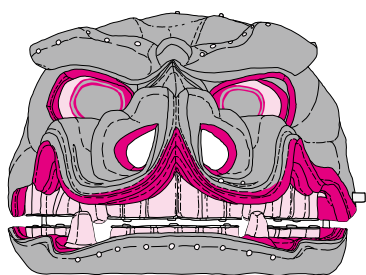
（3）中世における中国地方西部の木造獅子頭（図5・図6）

これまでの木造獅子頭研究の中世前半期における基準資料が多く見られる中国地方西部の獅子頭について同様に形態変化の流れを辿りたい。今回実測、及び観察ができたのは山口県防府市防府天満宮所蔵正平十（1355）年修理銘獅子頭、同正平十（1355）年製作銘獅子頭、山口県山口市花尾八幡宮所蔵元亨二（1322）年銘獅子頭（観察のみ実施）、同無銘獅子頭（観察のみ実施）、山口県山口市朝倉八幡宮所蔵永和三（1377）年銘獅子頭、広島県世羅町丹生神社所蔵正安三（1301）年銘獅子頭、同無銘獅子頭、広島県三原市御調八幡宮所蔵獅子頭の8体である。これらの獅子頭は中世にさかのぼる紀年銘の残るものが含まれること、防府天満宮と花尾八幡宮、丹生神社には1対になる獅子頭が残されており、1対の獅子頭は当初からのものではなく、1つの獅子頭は先にある獅子頭を写して後に製作されたものとされてきたことから、獅子頭の形態変化を考える上で貴重な類例と考えられるからである。

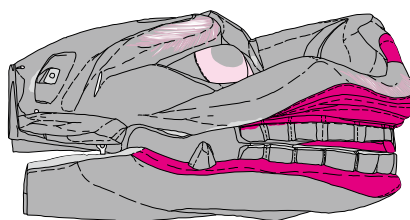
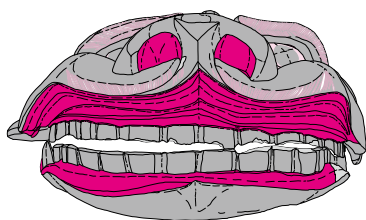
まず獅子頭の正面形態と側面形態を見ると、正面観が獅子型で側面形態がA類のものは山口県防府市防府天満宮所蔵正平十（1355）年修理銘獅子頭と山口県山口市花尾八幡宮所蔵元亨二（1322）年銘獅子頭、広島県世羅町丹生神社所蔵無銘獅子頭、広島県三原市御調八幡宮所蔵獅子頭で、正面観半球型で側面形態A類のものは広島県世羅町丹生神社所蔵正安三（1301）年銘獅子頭と山口県防府市防府天満宮所蔵正平十（1355）年製作銘獅子頭が正面観半球型で側面形態A類、正面観半球型で側面形態B類のものは山口県山口市花尾八幡宮所蔵無銘獅子頭と山口県山口市朝倉八幡宮所蔵永和三（1377）年銘獅子頭がある。山口県山口市花尾八幡宮所蔵元亨二（1322）年銘獅子頭と同無銘獅子頭は上



山口県防府天満宮〔正平十（1355）年修理銘〕：獅子型・A類



山口県防府天満宮〔正平十（1355）年製作銘〕：半球型・A類



山口県朝倉八幡宮〔永和三（1377）年銘〕：半球型・C類

- ：黒色の彩色部分
- ：赤色の彩色部分
- ：金色の彩色部分
- ：緑色の彩色部分
- ：彩色の剥落・欠損部分
- ：鉄金具
- ：銅金具
- ：植毛穴・幌穴など

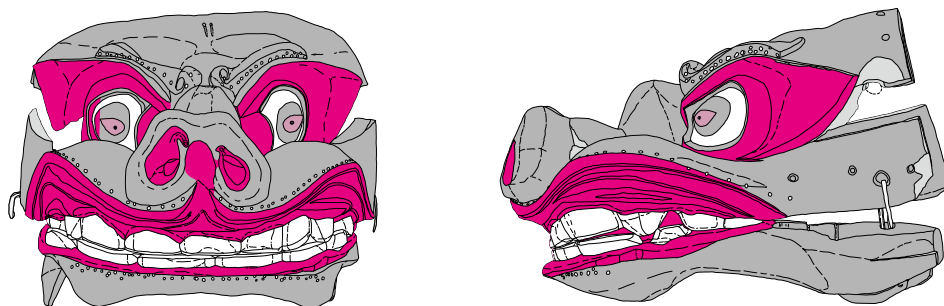
図5 山口県の獅子頭 S = 1/8



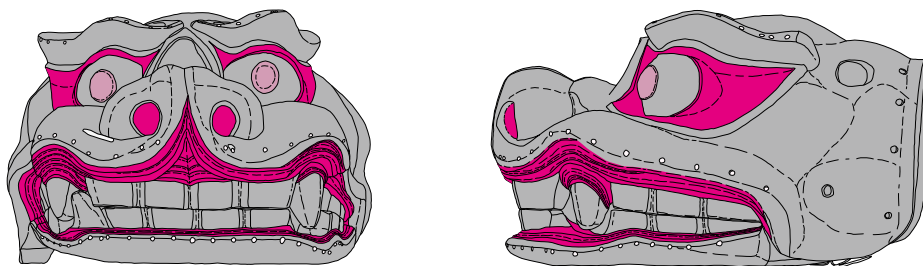
写真1 防府天満宮正平十年製作銘獅子頭背面写真



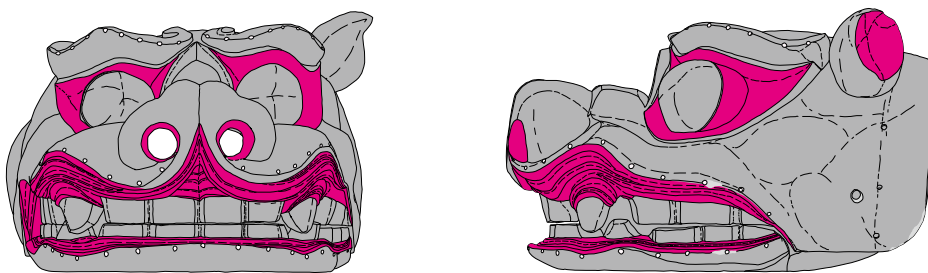
写真2 防府天満宮正平十年修理銘獅子頭背面写真



広島県御調八幡宮：獅子型・A類



広島県丹生神社〔正安三（1301）年銘〕：半球型・A類



広島県丹生神社〔無銘〕：獅子型・A類

- ：黒色の彩色部分
- ：赤色の彩色部分
- ：金色の彩色部分
- ：緑色の彩色部分
- ：彩色の剥落・欠損部分
- ：鉄金具
- ：銅金具
- ：植毛穴・幌穴など

図6 広島県の獅子頭 S = 1/8



写真3 御調八幡宮獅子頭俯瞰写真



写真4 御調八幡宮獅子頭左眼写真

唇の膨らみが眼の前面側になく、眼の後方側に位置するので、上唇の膨らみはどちらも眼尻の下端より低い。その他の側面形態の特徴は元亨二（1322）年銘獅子頭がA類、同無銘獅子頭がB類の特徴を示す。山口県防府市防府天満宮正平十（1355）年製作銘獅子頭は同修理銘獅子頭を忠実に真似ているゆえに牙に伴う上唇の盛り上がりが大きく表現されており、側面形態A類に分類しているが、鼻梁から額の立ち上がりや眼や眉の後方への伸びは側面形態B類の形態で、防府天満宮所蔵の一对の獅子頭における質感の違いにつながるものである。

よって14世紀前半までの紀年銘をもつ獅子頭は側面形態がA類の形態で正面観獅子型と半球型のものがあり、14世紀後半の紀年銘をもつ獅子頭は正面観半球型で側面形態B類の形態になる変化が見られる。このような変化が妥当であれば、一对の獅子頭として扱われている防府天満宮所蔵獅子頭的一对や花尾八幡宮所蔵獅子頭一对、丹生神社所蔵獅子頭一对にはいずれも型式差がみられ、防府天満宮の獅子頭に残される銘文から考えると、花尾八幡宮所蔵獅子頭一对も同様に製作された時期差を反映するものと考えられる。一方広島県世羅町丹生神社所蔵獅子頭一对においては、正安三（1301）年銘獅子頭の方が無銘獅子頭より形式的には新しい特徴も見られる。これについては後に述べる植毛（穴）の数の減少や鼻梁から眼の縁にみられる形態の形式化が表面的に認識できる点から、丹生神社所蔵無銘の獅子頭が同正安三（1301）年銘獅子頭より後に写して製作されたものと考え、比較的忠実に、時間差が少ない時期に製作された結果と考える。表面の漆幕が正安三（1301）年銘獅子頭の方が多く剥落している点から無銘獅子頭より古く見えるが、この一对の獅子頭には後世の黒漆の上に金箔が貼られ、その後さらに黒漆が塗られていることから、表面の雰囲気は時期差には関係ないものと思われる。

次に獅子頭に残された植毛（穴）を見ると、山口県山口市朝倉八幡宮所蔵永和三（1377）年銘獅子頭を除いた他の獅子頭には頭部頂部と眉部、上唇、下顎に植毛（穴）があり、朝倉八幡宮所蔵獅子頭は眉部と上唇に金色の彩色による

植毛表現がみられる。このようにみると14世紀後半には植毛（穴）がなくなるものもあるが、一对の獅子頭として製作されたものは、同じ位置にまねて植毛をする特徴が見られる。一方で各獅子頭の各部における植毛（穴）の数量は防府天満宮所蔵の一对の獅子頭に見られるように、正平十（1355）年修理銘獅子頭が正平十（1355）年製作銘獅子頭より植毛（穴）数が多く、花尾八幡宮所蔵の一对の獅子頭や丹生神社所蔵の一对の獅子頭においても植毛（穴）の減少する傾向が見られる。

以上の分析から花尾八幡宮、防府天満宮、丹生神社には中世にさかのぼる紀年銘の残る1対になる獅子頭が残されているが、花尾八幡宮と防府天満宮のものは、古い紀年銘の残る獅子頭は14世紀前半までの形態をもっているが、もう1つは表面の彩色や植毛は似せてあるが、全体の形態（肉取り）は14世紀中頃から後半のものである。よって花尾八幡宮と防府天満宮の獅子頭においては1対の獅子頭にする為、後に製作されたものは、前からある獅子頭ともう1つ別の獅子頭のモデル（製作者のイメージ）の存在が考えられる。また世羅町の丹生神社の獅子頭は、無銘の獅子頭について植毛の数が減り、鼻稜の形や眼の形においてやや鋭さが無いものの正安三（1301）年獅子頭を忠実に写しており、正面観獅子型であることから、製作時期は正安三（1301）年獅子頭と比較的近い時期で、より古いタイプのモデルがもう一つ存在した可能性が高い。一方で丹生神社正安三（1301）年銘獅子頭の正面観が半球型である点は、14世紀において展開する半球型の始まりが見られる点で興味深い。

広島県三原市御調八幡宮所蔵獅子頭はこれまで平安時代の作とされてきたもので、上顎と下顎の口部の歯牙付近における大きな抑揚のある全体の肉取りや眉部の形態は防府天満宮の正平十（1355）年修理銘獅子頭や丹生神社所蔵正安三（1301）年銘獅子頭より明らかに異なる古い様相が見られる。しかし彩色されて残る全体の雰囲気は何故か丹生神社所蔵正安三（1301）年銘獅子頭によく似ている印象があり、地理的に近い丹生神社所蔵正安三（1301）年銘獅子頭の1つのモデルは、御調八幡宮所蔵獅子頭であっ

た可能性も考えられる。

平安時代後半から14世紀後半にかけての獅子頭の形態変化に併せて、植毛（穴）は14世紀初頭の紀年銘をもつ獅子頭には、眉部や上唇、下顎の縁部に多数の植毛（穴）が施されるが、14世紀中頃から後半製作と考えられる獅子頭には植毛（穴）の数が明らかに減少しており、山口県山口市朝倉八幡宮所蔵永和三（1377）年銘獅子頭には植毛（穴）がないことから、14世紀には急速に植毛の製作習慣は薄れていったものと考えられる。

（4）小結

以上の分析をふまえて、中世における東海地域と中国地方西部の獅子頭を比較する。

共通点として両地域の獅子頭の変遷が14世紀後半までの獅子頭において正面観獅子型から半球型へ、そして側面形態がA類からB類への変化がほぼ同様にみられることが明らかになった。一方、相違点として東海地域の獅子頭は鎌倉時代の中で植毛の数が減り、14世紀には髭の少ないことが特徴といえる。

よって、愛知県愛西市日置八幡宮所蔵木造獅子頭の上顎は、正面観獅子型で側面形態がA類であること、眉部と上唇に植毛（穴）が存在することから、鎌倉時代から14世紀前半の獅子頭の特徴をもつものであり、新たに確認された紀年銘と対応する。

日置八幡宮所蔵の獅子頭と尾張国日置荘

前節までの分析により、東海地域の獅子頭の形態の変化や特徴がある程度明らかにできたように思われる。ここではその成果をふまえて、今回、製作の紀年銘が判明した日置八幡宮所蔵獅子頭の実態分析を通じて考えられる東海地域における獅子頭の変遷と小地域色の性格について明らかにし、中世の愛知県愛西市日置町付近に存在した日置荘の文献的資料から日置八幡宮所蔵獅子頭の歴史的意味付けを考える。

（1）東海地域における鎌倉時代の獅子頭

まず鎌倉時代の獅子頭における細部の特徴を検討し、東海地域に見られる小地域色について考える。

日置八幡宮所蔵獅子頭と知立神社所蔵獅子頭

を比較すると、全体の肉取りにおいては同じ分類をしたが、相違点としては鼻先から眼の前面までの長さが日置八幡宮所蔵獅子頭の方が知立神社所蔵獅子頭より長く、牙に伴う上唇の抑揚が緩やかである点、知立神社所蔵獅子頭の鼻梁や頭部の表現にみられる写実的な筋肉表現は日置八幡宮所蔵獅子頭ではより小さくなり、鼻梁の表現では形式した形態になる。また歯牙に見られる鉄製板や鼻先に見られる上唇からの切れ込みも知立神社所蔵獅子頭には見られるが、日置八幡宮所蔵獅子頭には見られない特徴である。共通する点は眉部と上唇に植毛が共にみられ、植毛数も類似する。これらは形式的に先行する形態と思われる知立神社所蔵獅子頭から日置八幡宮所蔵獅子頭への時間的変遷と同時に小地域色を示す地域的変容の可能性があるものである。

次に日置八幡宮所蔵獅子頭と東海地域の14世紀初頭の紀年銘がある獅子頭と比較すると、大まかな肉取りにおいては日置八幡宮所蔵獅子頭の方が牙に伴う上唇の抑揚が大きく表現され、比較的鼻先と眼の前面の距離が短い岐阜県美濃市真木倉神社所蔵嘉元三（1305）年銘獅子頭においても上唇の抑揚が小さくなる傾向が見られる。他の箇所表現においては、三重県鈴鹿市伊奈富神社所蔵弘口（安）三年銘獅子頭とは鼻梁が低い団子鼻である点は共通するが、頬にみられる巻毛の彫刻表現がある部分で異なり、美濃市真木倉神社所蔵嘉元三（1305）年銘獅子頭とは全体の分類では同じであるが、鼻先から眼の前面までが短い点、鼻梁が高い点、耳が細長い点などの特徴は異なっており、この2つの獅子頭に見られる特徴（日置八幡宮所蔵獅子頭との相違点）は14世紀後半以後の近在の獅子頭に見られ、小地域色として存在するものといえる。一方で、岐阜県岐阜市諏訪神社所蔵嘉元四（1306）年銘獅子頭のように低い鼻梁の団子鼻に植毛が比較的多く見られるものの存在は日置八幡宮所蔵獅子頭に近い特徴であるが、美濃地域の近在の獅子頭とは異なる。

よってこれらの小地域色と考えられるものは、後述する植毛（穴）表現にみられるように、地域全体が同じデザインや表情の獅子頭である訳ではなく、地域的傾向はあるがモザイク状に

分布するあり方が窺われ、鎌倉時代における地域の変容のあり方、つまり製作銘に残る獅子頭の工人が基本的には地方の神官や職人などであること（町田市立博物館 1996・1997 他）を反映しているものといえる。

（2）尾張地域に見られる植毛表現

また植毛と植毛表現についても、東海地域内において小地域色が見られる。植毛が比較的早い時期に消失する地域は岐阜県美濃地域の美濃市真木倉神社所蔵嘉元三（1305）年銘獅子頭や美濃市白山神社所蔵至徳二（1385）年銘獅子頭と同無銘獅子頭、美濃加茂市天神神社所蔵長享二（1488）年銘獅子頭に類例があり、14世紀初頭の真木倉神社所蔵獅子頭には眉部の後方に左右に3個ずつ植毛が見られるだけであり、以後の時代的变化もあるが地域色として受け継がれたものである可能性がある。一方で愛知県尾張地域では14世紀前半の愛西市日置八幡神社所蔵獅子頭から一宮市真清田神社所蔵文明三（1471）年銘獅子頭を経て、愛知県愛西市星大明社所蔵永正七（1510）年銘獅子頭まで、眉部の表現は植毛がなくなり、彫刻表現が見られるようになるが、上顎には植毛を残す状況が見られる。

このような植毛表現や耳や鼻にみられる表面的雑作の部分は、獅子頭を見る側の意識が強く反映されるものと考えられ、中世における尾張地域の人々は獅子頭には上唇の髭が存在するものという意識が存在したものと思われる。

（3）東海地域における獅子頭の型式変化の意味

先に述べた東海地域においてみられる小地域色とは別に獅子頭の正面観や側面形態といった獅子頭の肉取りに関する特徴は、やや時間差が存在する可能性はあるが東海地域全体における大きな変化であり、中国地方西部の検討でも見たように地域を越えて存在したものといえる。製作銘が残る獅子頭において工人が分かるものも基本的には地方の神官や職人などであることから考えると不思議な変化であるが、その時代毎の様式的変化と考えられるものである。特に側面形態 A 類から B 類、そして C 類への型式変化に見られる特徴は、歯の噛み合わせ音や眼の眼光により威嚇して邪気を払っていた古代の獅子頭から考えると、眼の表現が簡略化し鉄歯

が消失すること、鼻先や口部分が大きく誇張されて表現されてくることは一連の変化であり、伎楽などの舞の仮面から行道に伴う舞の仮面への変化に伴う周囲への威嚇表現が意識されたものと考えられる。この変化は神社や寺院などの行道を執行する側の意図を受けた製作者の意識が反映された性格があるものと考えられる。

先に述べた小地域色と見られる地域の変容がその地域に残る獅子頭を見本に写して製作するという地方の獅子頭製作者（工人）の特色であるならば、このような現象の背景は各地域の製作者（工人）が独創的に類似したものを製作したと想定するより、中世前半期における獅子頭の新たなデザインを生み出した別の地域を介在したデザインの流入（入手）が存在した可能性が高いものと考えられる。

以上のような中世の獅子頭において東海地域と中国地方南西部にみられる型式変遷のデザインの発祥地としての候補地は、地理的には当時の政治・文化の中心地としての京都を候補地として考えるのが妥当であろう。

（4）日置八幡宮所蔵獅子頭製作の背景

愛知県愛西市日置八幡宮は日置八幡宮境内付近にて出土した明応二（1493）年九月二十八日の年紀をもつ日置八幡宮所蔵懸仏があり、その中に「日置庄 八幡宮」の刻銘があることから、同宮が日置荘の含まれていたことを示す。さて、この日置荘は平安時代後期には藤原氏領であり、その後文治三（1187）年十月二十六日、源頼朝がこの所領を源氏と縁の深い左女牛若宮に寄進していることが『吾妻鏡』に残されている。そして室町時代には左女牛若宮別当職は醍醐寺門跡の管領下に置かれることになり、当荘も応永六年以降は醍醐寺方管領諸文跡等所領目録（醍醐寺文書）にあげられている。左女牛若宮は室町時代においても所領が安堵され、応永十七（1410）年に足利義持の参拝を受けるなど、足利将軍家の厚い帰依を受けて栄えていたようである。よって日置八幡宮が所蔵する獅子頭の製作された鎌倉時代中頃は左女牛若宮領に属していたことになる。また現在日置八幡宮の東に隣接する大聖院は真言宗の寺院であり、古くは光明院と称し日置八幡宮の別当寺であった。光明院の開山は鎌倉期の僧明恵と伝えられるが、

『尾張志』は源頼朝の建立を伝えながらも「故縁定かならず、慶長十三戊申円誓法師再興す」と記す。明恵上人は鎌倉時代初頭に活躍した華嚴宗の僧であるが、やはり旧光明院との関係は明らかではない。

したがって日置八幡宮との関係を確実に復元できるのは鎌倉時代から室町時代前半まで左女若宮八幡社領であった点であり、先に分析した獅子頭のデザインの系譜が京都にあることと矛盾しないものである。紀年銘のある鎌倉時代中頃は武家政権が基盤を強めていく時代で、日置八幡宮も元からの日置荘の経済基盤の上に存在したものと考えられ、木造獅子頭は製作された詳細な契機は定かではないが、当時における八幡信仰興隆を背景に製作され、祭礼に盛んに用いられたものと考えておきたい。

最後に今回の分析により正面観半球型の出現してくる変遷は示せたものと思うが、正面観箱型の出現してくる経緯は十分に示せていない。また獅子頭の分類として「嵩高」と「扁平」という分類との関係についても十分に述べる事ができなかった。これらの出現や消滅に関する経緯や背景についての解明は今後の課題としたい。

尚、今回の調査にあたり、お世話になり、ご教示を賜った多くの方々に記して感謝したい

参考・引用文献

- 愛西市教育委員会 2008 『あいさいの獅子頭-よみがえる中世の獅子頭-』
白杵華臣 1984 「防長の獅子頭」『防潮の獅子頭』防府天満宮
門屋光昭 1981 「黒森神社の権現さま考」『岩手県立博物館だより』No.8 岩手県立博物館
田邊三郎助編 1981 「行道面と獅子頭」『日本の美術』No.185、至文堂
田邊三郎助 1986 「獅子頭の変遷-形態と技法-」『悠久』第26号、鶴岡八幡宮社務所編
田邊三郎助 1997 「日本の獅子頭の変遷-形態と技法-」『獅子頭-西日本を中心に-』町田市立博物館
竹内理三編 1991 角川書店地名辞典『愛知県』角川書店
畠山豊編 1997 『獅子頭-西日本を中心に-』町田市立博物館
早瀬輝美編 1996 『獅子の世界』八代市立博物館未来の森ミュージアム
町田市立博物館 1996 『獅子頭-東日本を中心に-』
山崎 撰編 1994 『仮面の系譜』八代市立博物館未来の森ミュージアム
1982 角川書店地名辞典『京都府』角川書店

(50音順、敬称略)。

神社・機関

〔愛知県〕知立神社、日置八幡宮、星大明社、真清田神社

〔岐阜県〕天神神社、白山神社、真木倉神社

〔三重県〕神館神社

〔広島県〕丹生神社、御調八幡宮

〔山口県〕朝倉八幡宮、花尾八幡宮、防府天満宮

愛西市教育委員会、一宮市博物館、岩手県立博物館、大田庄歴史館、桑名市教育委員会、桑名市博物館、知立市歴史民俗資料館、美濃市教育委員会、みのかも文化の森市民ミュージアム、山口県立山口博物館、知立市立歴史民俗資料館個人

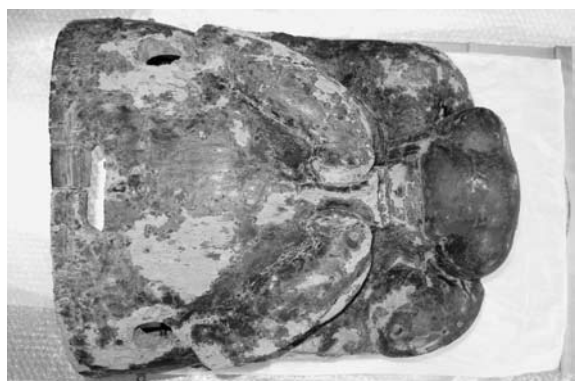
浅鋤毅、飯田清春、石井里英、石田泰弘、伊原慎太郎、岡田美穂子、神山巖夫、川向富貴子、久保禎子、桑原國雄、幸泉満夫、佐伯康男、榊原正勝、佐藤弘次、佐藤徳潤、鈴木宏明、清山健、旦野幸一、中西正史、幅榮治、林光輝、廣田紀昭、水谷芳春、村瀬英彦、山田二郎、山本昌治、横井孝夫、吉宮博胤、依田康宏



1



2



3



4



5



6

1：左前面 2：右側面 3：上面 4：下顎下面 5：下顎下面線刻名（財団法人元興寺文化財研究所撮影）
6：上顎線刻銘（写真は財団法人元興寺文化財研究所撮影。文字の線画は筆者加筆。左側写真が獅子頭上顎の線刻銘、右側写真が獅子頭上顎右側の線刻銘。）